

いづみ

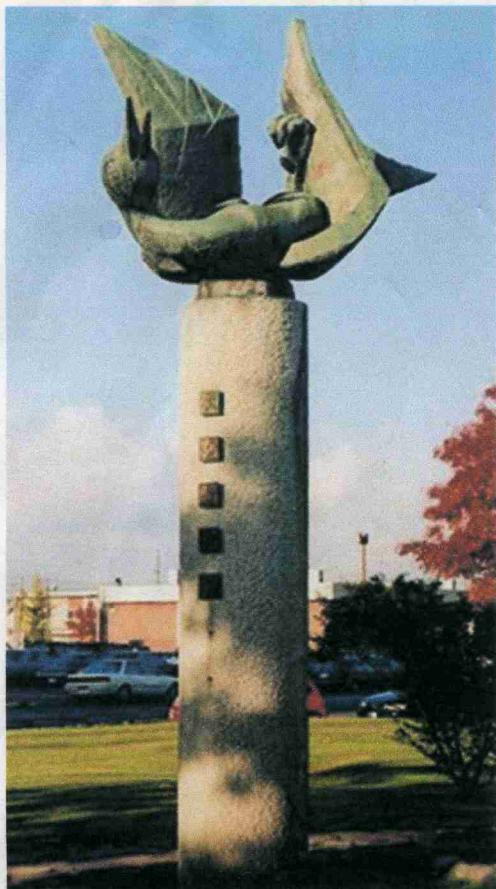
彫刻美術館友の会会報

第6号

平成16年元旦

題字：国松明日香氏

本郷新彫刻シリーズ 6



「不死鳥」

1968(S43)年作

江別市市役所前

江別市開基90周年と市制施行
15周年を記念して役場前小公園に設置された。

第32回新制作出品作品
高さ2.2m、横3m、幅2m
台座4m 白御影石

明けましておめでとうございます。

橋本信夫会長

新生友の会が2度目の正月を迎えた。この間会員数は115名に増加し、また念願の会報『いづみ』の定期刊行も軌道に乗り、発行部数が500部になりました。これもひとえに会員と関係者の皆様のご協力とご努力の賜物と心から御礼申し上げます。

新生友の会の発足に合わせて発行された「いづみ」創刊号には彫刻美術館理事長の藤島様から、美術館が生き延びるための原動力としてボランタリーな市民の支援活動は欠かせないととの見解が寄せられています。国・地方財政の三位一体改革の一環として補助金制度の見直しが図られるなか、補助金依存型美術館の将来は容易ではありません。それだけに美術館支援運動に、人生経験豊かな大勢の会員が、それぞれの持ち味を活かしつつボランタリー精神を發揮することの意義は計り知れない重みがあります。

新年度に向けて、友の会の『提言』(いづみ5号)の意のあるところを館と関係者に広く汲み取って頂き、館と会との円滑な交流を通じてより効果的な支援活動が創り出せるよう皆で努力してまいりたいと願っております。

友の会が美術館、会員と市民の三つをつなぐ媒体として十分役割を果し得るよう「いづみ」と「友の会ホームページ」の発行を軸に、美術館支援態勢の確立、入館者と会員の倍増と会員の親睦に夢を託して年頭の挨拶といたします。

アメリカでのささやかな心の交流

川上りえ（彫刻家）

昨年、アメリカのレジデンシープログラムに参加した際、ジョージという年配の画家ために顔のモデルをしました。

彼は無表情で大変ぶっきらぼうに話す人で、最初はちょっと怖いなと思っていました。でも彼が奥さんをこよなく愛していて、ミュージシャンの息子の歌う曲を聴いて涙するような、心温かい人なのだとわかり、印象に残ったのでした。

今年また、同じところでレジデンスをすることが出来ました。滞在作家の中にアリスという大変上品な画家のマダムがいて、いつも優しい笑みを浮かべ話しをしてくれる彼女とは、すぐにお友達になりました。

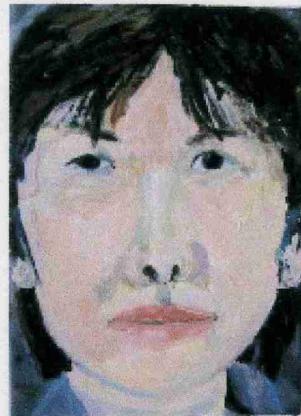
アリスがある日私に、「あなた、去年ある画家のために顔のモデルをしなかった？」といいました。「なぜ知ってるの？」とびっくりして聞き返すと、彼女は勝ち誇ったように「私が彼の妻よ」というではないですか。本当に不思議な縁です。私は思わず感動して彼女に抱きついてしまったほどです。

アリスのところには毎週ジョージからチョコレートが送られたそうです。長年連れ添った夫婦でもこのようなやり取りが出来るなんて驚きです。

レジデンスを終え、ニューヨークに立ち寄

ったとき、ジョージとアリスに会うことが出来ました。二人ともまたレジデンスをしよう

と話していたので、二人一緒に参加するのと聞くと、ジョージはまたしても仏頂面で「二人一緒ではだめだ。あそこではそれが個人の作家として滞在してこそいい仕事が出来るんだ。」と言い切りました。彼の愛がただの甘いチョコレートのようなものだと思っていた私は浅はかでした。



ジョージの描いた川上りえ氏の肖像画

ジョージは私に、彼の描いた私の肖像画と一緒にアリスに送っていたものと同じチョコレートをプレゼントしてくれました。

両方とも船便で送ったのでまだ届いていません。それが届いたら彼らに長い手紙を書こうと思います。

近い将来の彼らとの再会を願って・・・

目次

巻頭言	橋本信夫	1
アメリカでのささやかな心の交流	川上りえ	2
教育普及活動と美術館	三輪 望	3
彫刻美術館平成15年度本郷新後期収蔵展		4
印象に残った彫刻美術館 斎藤公雄・斎藤美年子		5
碌山美術館友の会との交流	橋本信夫	5
北海道の現代美術の展覧会「北の創造者たち展」	岩崎直人	6
北海道の野外彫刻の現状（3）	仲野三郎	7
道北彫刻巡り	小尾 陞	8
道北彫刻めぐりに参加して	森 茂樹	9

目次

なまこ山の自然	国兼治徳	9
なまこ山散策	榎本真澄	10
秋の彫刻観賞バスツアー、石狩へ	原 寿子	11
いきること、くらすこと	渡辺洋子	11
石狩バスツアーに参加して	大島美和子	12
ギャラリー門間を訪れて	原 典夫	13
本田明二ギャラリーから「展示作品の変更」	近藤 泉	13
拔海の目/二つの展覧会		14
拔海の目/彫刻美術館との出会いを通じて今思うこと	15	
友の会だより		16

教育普及活動と美術館

札幌彫刻美術館館長 三輪 望

2003年も終りを告げ、平成15年度も3か月となりました。新年を迎え、新たな希望と決意に満ちていることでしょう。多くの人々の協力・ご支援により少しづつではあるが入館者が昨年度に比べ増加してきている。嬉しい限りである。地域に活ける美術館として数少ない職員が一人一人知恵を絞りながら運営している。

本年度、夏の夜間延長開館、それに伴うコンサートの実施、5月5日子どもデーに小・中学生に彫刻デッサンの場を設け、素晴らしい作品を表彰した。11月3月にはサンクスデーとして多くの人々に鑑賞して頂いた。いかにして本郷新の作品、札幌彫刻美術館をPRするか。これは近年の課題として常にあるものだ。前会報「貸館業務に至る思考」で「観覧者数が評価基準の一つとするならば少しでも多くの入館者が訪れる事を私は望む」と記録したが、大切なこととして

「来館者へのより良いサービスの提供と考えて」と結んだ。「・・・サービスの提供」の一つとして、2004年度より行う「美術館展示スペースの貸し出し」について（ご案内）は、『北海道の美術芸術文化のさらなる振興発展のために、微力ながらお手伝いさせていただく。道内で制作活動をされておられます作家の皆様方に作品の発表の場として、当美術館の展示スペースをお貸しすることとなりました』と謳い、関係各位の皆様方にお送りしたところだ。

美術館勤務2年目の私は、多くの事柄を考えた。お陰で美術館運営の何たるかを入口部分だけでも学び得たことに、喜びと感謝の念を抱いている。

昨年度（2002年）より「友の会」が新しい活動を展開した。頑張って活動している様子を垣間見ることができる。

「OREP研究所の地域社会参加活動の15周年記念冊子」を先日目にすることができます

た。中に『・・・活動を継続できるキーワードは、「誰かを助けるために」とか「奉仕するための活動」ということを前提にしない』という文章に出会う。「自分の人生に益があるって・・・だからこそ続けられることを信条にしている」の言葉に「なるほど」と私は思った。

先の会報で、「札幌彫刻美術館に対する提言」が橋本会長よりあった。本年度の答えは一つ「無理なさらないで、できることを少しづつで結構です」と会長にお応えしました。1、事務支援。2、教育・普及活動。3、友の会支援戦略然り、ご理解頂きたい。

2002年春から全国の国立美術館・博物館の常設展観覧料を小・中学生は無料になった。多くの子どもたちが文化財や芸術作品に直接触れる機会を持ち、感動する体験を充実させたい、ということだ。札幌彫刻美術館も2003年より無料とした。

秋風が心地よい9月のある日、記念館2階「横たわる青年」の前で、小学2年生の女の子がほおづえついでしゃがみこみ、展示作品とにらめっこしている情景があった。その近くには「砂」の作品もある。私はその小学生がどんな感動に浸っているのか、今何を考えているのか探りたい気持ちになっていた。子どもにとって直接体験・経験がどれほど大切かいうまでもないが、地元の小学校の低学年が「地域に愛着をもつ」をテーマに積極的に美術館での授業を開催し、多くの彫刻に触れながら豊かな感性や創造の力を育んでいる。

幼い時の読書が有益であるように、美術館・博物館での直接体験が豊かな感性を育てる大きな力となるのだから。学芸員小中学校派遣・体験美術館等・他協力を惜しまない。

記念館2階の別の場所では、中学生がメモをとりながら友と話している。「本郷新ってすごいな！」「学校に帰って報告だ」。

本館

悲しみと苦悶の人々 無事の民シリーズ

本郷新は1970年に14点の「無事の民」シリーズを制作した。紛争によって悲惨な状況に置かれた罪なき人々の悲しみと苦しみを、身体に布を巻きつけ抑圧された人々の苦しみを彫刻という表現を通し、私たちに具体的に提示している。今回は、ブロンズ作品と石膏原型を併せて展示することで制作過程をわかりやすく紹介した。

記念館

素描展 II

昨年展示された本郷新の未公開スケッチブックのうち、まだ紹介されていなかった作品を展示了。

旅先でさりげなく描かれた風景は、瞬時に対象を捉え、魅力的な作品となっている。

これらのうち、人気の高い北海道のスケッチ画を絵葉書*に製作した。

札幌彫刻美術館
平成15年度
本郷新
後期収蔵品展

平成15年10月18日(土)

平成16年3月21日(日)

後期 行事予定

- 宮の森散策と美術館鑑賞の会 ステージ VI 春雪の三角山 3月13日(土)
- 教育普及事業 * 子供(小学生) 造形教室 1月15日(木)
講師:芝木秀昭先生 先着順36名まで 受講料1000円
- * 第2回造形教室(テラコッタ) 2月21日~22日(日)
講師:小野寺紀子先生 先着順16名まで 受講料5000円

お申し込みはお早めに!! Tel & Fax: 011-642-5709

絵はがき

本郷新の風景スケッチ作品

本郷新の未公開スケッチブック(1968-1974)の中に、北海道の風景を早いタッチで描いた小作品があります。これらはアルバムに写真のように貼られていきました。そこでこれらのうち人気の高かった18点を当館で3組の絵はがきにしました。

- 大雪シリーズ(6枚)
- 日高シリーズ(6枚)
- 春香山シリーズ(6枚)

各組500円

ご購入は本館窓口で!!

印象に残った彫刻美術館

斎藤公美雄（会員） 斎藤美年子（会員）

長野県穂高町（人口約3万人）にある財団法人碌山美術館とのご縁は10数年前、東京在住の画家ご夫妻によるご案内で始まりました。碌山（荻原守衛）の彫刻に魅せられて毎月のようにここを訪れ、その度ごとに「心やすらぐ思いである」と回想しておられました。

日本近代彫刻の先覚者となった荻原守衛（碌山）は明治12年東穂高村に生まれ、22歳でニューヨークの画学校へ、さらにパリで絵画の勉強に取り組んでいました。しかし当時パリで新しい試みに挑戦していたロダンと彫刻「考える人」に出会ったことからその芸術性の高さに衝撃を受け、彫刻家になることを決心し、遂にロダンの教えを受けながら美術学校アカデミージュリアンで彫刻に専念するようになりました。

7年間の留学から帰国した守衛は姿かたちの細部にとらわれない生命感あふれる作品を制作し、日本近代彫刻の最高傑作である絶作「女」（国の重要文化財）をはじめ15点の珠玉の彫刻を残し、30歳の若さで夭折しました。

守衛の求め続けた「生命の芸術」は、彼の教えや影響を受けた優れた彫刻家たちによって引き継がれ、多くの傑作が生まれました。その頂点である荻原守衛の彫刻は時が経つほどに日本近代彫刻の金字塔として輝きを増しています。

碌山美術館友の会との交流に向けて

札幌彫刻美術館友の会 会長 橋本信夫

近代彫刻の先駆者として敬愛する荻原守衛先生の作品が常設展示されている長野県穂高町の財団法人碌山美術館は、北海道の彫刻ファンにとって憧れの的で、いつか必ず訪れたいと願っている美術館の一つです。

最近、当会の斎藤公美雄会員が碌山美術館友の会にも入会されたことから、思いがけず碌山美術館の行事や友の会の活動状況について詳しく知ることができるようになります。

碌山美術館に隣接している中学校を卒業された北海道教育大学の彫刻家故丸山隆先生（平成14年没）も碌山の影響を受けた一人と聞いております。

碌山美術館は荻原守衛の作品と資料を保存し、公開するために昭和33年、30万人の支援と寄付によって誕生しました。また碌山と関係の深い優れた一群の芸術家たちの作品を合わせて蒐集保存し、日本近代彫刻の流れを明らかにしようと努め、現在に至っています。

会館以来の入館者数は平成14年3月までに600万人を突破し、昭和56年5月6日の入館者は過去最高の4396名にも達したことです。そしてこの美術館が入館料のみで運営されていることに敬服の他ありません。

開館と同時に発足した友の会の『きまり』によると「『できる人が、できる時に、できることを』の精神を碌山美術館の諸活動、来館者の心のよりどころにしての美術館環境の整備・充実を支援し、併せて会員相互の交流も図る」と記されています。美術館と友の会が一体となって展開されていることがこの美術館の実績につながっているのだと思います。過去3回訪れた碌山美術館へ再度の機会を得たいと夢をふくらませているところです。

た。

両美術館は所在こそ長野県と北海道と地理的に大変離れてはいるものの共に高名な彫刻家の具象作品を主体とする財団法人美術館です。また友の会にも、長い美術館支援活動や協力関係を経て現在の新しい組織に至った経緯などに多くの共通点があります。

そこで碌山美術館友の会事務局に相互の情報交換や交流についてご相談をしたところ、先日会長の野口卯年夫氏から「連絡を取り合って共に成長を」との極めて好意的なご連絡を頂きました。

新年度に向けて、両友の会の永続的且つ親密な交流と発展を心から楽しみしております。

北海道の現代美術の展覧会

「北の創造者たち展」

岩崎直人（芸術の森美術館学芸員）

「現代美術」と呼ばれるものはとくに敬遠されがちである。よしんばその類のものに触れることがあったとしても「難しくてよく理解できない」とか、「なぜこれがアートと言えるの？」という声をよく耳にする。芸術の森美術館にて2003年10月26日から始まった展覧会「北の創造者たち展」でも同様の感想を漏らす鑑賞者を時折見かける。なかには怒号を散らして去りゆく者もいるほどだ。肯定するも否定するも、好きでも嫌いでも構わない。しかし、はじめから天にも届きそうな高い城壁を構え、何もかも受け容れないとする姿勢が見られてしまうとその人に対して哀憐の情すら覚えてしまう。

確かに、わかりやすい風景画、具象彫刻と比べれば理解に多少の時間と知識を要するのが現代美術かもしれない。かと言って、逆に意識が過剰になると、現代美術に近づくのが億劫となり距離を遠のかせることになってしまう。壁の高さが下がっても濠の幅が広がってしまっては元も子もないのだ。これを解消するひとつに、むしろそれらをアートとして意識しないという手がある。

例えば、浮世絵だって今でこそ美術史の中に位置づけられているが、江戸の当時には、当世の生活や文化、社会を背景に描かれた単なる時世粋の絵画であって芸術としては捉えられていなかった。江戸の人たちは自分と同時代を生きる絵師によって描かれた絵画を娯楽の一部として積極的に享受していたのである。彼らは今という時間、気分を目一杯楽しんでいた。私たちも同様で、同じ時を生きる作家によって作られたモノを現代という時間と地点に立脚して見、楽しめばよいのである。ただし、その前をさらっと通り過ぎるぐらいでは、それを十分に堪能することはできない。今、眼前にある対象物が何を発しているか、私たちに何を気づかせようとしているのか、それを知ろうという態度をもって対象物と対峙すれば必ずとそれを作った者の思いが伝わ

って来るはずである。つまり、「真剣」に「楽しむ」ことが肝要なのである。

さて、今回で9回目となる「北の創造者たち展」一巻間においては「北創展」と通称されるなどして広く浸透してきた感がある。北海道という一地域における美術の現況を良質な作家・作品をもって紹介してきたことは、当館の展覧会活動において最も自負するところのひとつとして挙げられよう。もちろん、それだけの地盤を北海道が有すること、即ち北海道の現代美術の土壤がじつに豊かであることが大前提としてある。東京、大阪、名古屋以外の都市で、質量ともに優れた美術家をこれだけ集められるところはそう多くない。現に、優れた作家は中央に流れてしまうとある地方の学芸員が嘆いていた。185万もの人口を有する札幌である。あとは、それを享受する鑑賞者層の厚みを増すためにも我々学芸員やボランティア、友の会の皆様が先陣を切り、それぞれの方法論を以て美術の鑑賞教育に深く携わり、尽力しなければならない。

「北の創造者たち展」から



伊藤隆介『薄野心中』



鈴木涼子『Mama Do I!』

北海道の 野外彫刻 の現状3

仲野三郎 会員

カメラ片手に歩き出
して十年、北海道の野
外彫刻の現状を調査

していますが、その概要を1, 2でご報告しま
した。その設置状況ですが年々と言うよりも
日々変化しています。その変化の原因は、1
新規設置、2移動、3老朽による消滅です。

今年になっての新規設置は、函館1、七飯
4、室蘭8、岩見沢2、遠軽3の6市町18
作品です。岩見沢の作品は佐藤忠良さんで、
市民会館の完成に伴い設置されたものですが、
同時に既設置4作品が何処かに移設されてしま
いました。また遠軽町でも8月末の公園の
完成に合わせて人魚姫の像が移設されるなど、
設置状況は日々変化しています。更には音威
子府村では、村のシンボルとも言うべき砂澤
ビックの「思考の鳥」が遂に折れて、ビック
の大型作品はゼロになりました。

このような変化も追跡調査して、正確を期
すことは欠かせないことです。

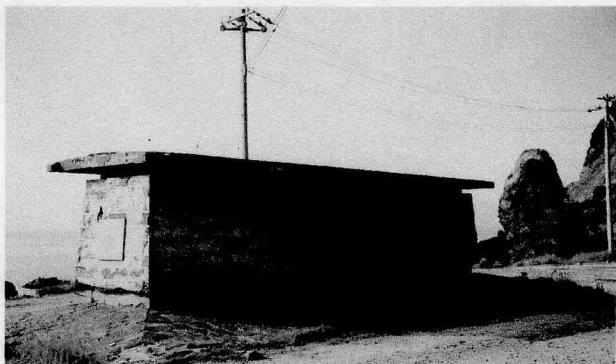
こうした作品の設置状況の変化とともに忘
れてならない事に作品の維持管理があります。
つまり作品の設置はまた保全の開始でもあります。
鑑賞を妨げる変化の原因是、風雨、砂
塵、凍結、そして鳥です。時には人の暴力を
受けることがありますこれは論外で、これ
らの影響をどう防ぎ維持するかは大きな問題
です。

技術的には、ただ鳥の糞や埃を落とせばいい
と言うような簡単なものではないでしょう
し、費用も大変なことはよくわかります。し
かパブリックの空間に設置するからには、設
置時の状態を保つことは設置者の義務とも言
えます。

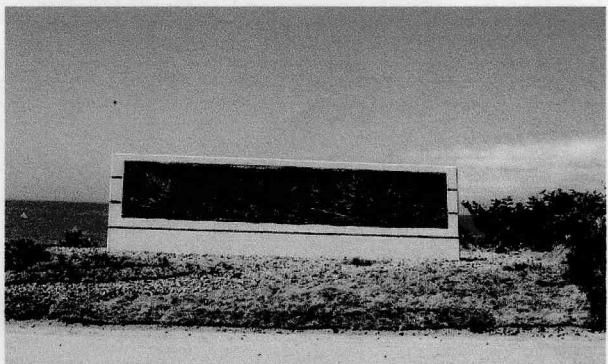
今年になって嬉しいことがありました。一
昨年7月、皆様のご支援を得て開催できた写
真展に関心のある道新の記者が～その後どう
していますか～と声をかけてくれました。今
も続けていますよ、と答えると自宅まで取材
に来ました。記者の関心は作品のメンテナン

スで、昨年5月“野外彫刻を追うーある写真
行脚”と題した2回の連載レポートとなりま
したのでご記憶の方もいらっしゃると思います。
そしてどうでしょう、新聞の力は強力です。
近くの新設の駐車公園入口に移設された
のです。しかも装いを新たにして

「網を曳く男たち」
米坂ヒデノリ作 岩内町雷電海岸



上 移設前：トンネル間の広場



下 移設後：座を新たにして公園入口に
あまりのタイミングの良さにびっくりしました。
多分、地元岩内町ではトンネル完成後の
作品をどうするか検討中だったのだと思います。
しかし私にはこの記事が作品移設のきっかけ
になったと思ってなりません。野外彫刻
を追った10年の積み重ねがこうした形にな
ったのです。

現在の作品の記録件数は2200点を越えま
した。今後これをどうまとめてみなさんを見て
頂くかが課題です。一日も早くよくやった
ねと言われる資料にしたいと日夜取り組み中
です。

ご支援いただければ幸いです。

(野外彫刻写真家)

彫刻鑑賞旅行

感想文集・①

「道北彫刻めぐり」に参加して

小尾 陞 会員

彫刻美術館主催で9月17日（水）～18日（木）に開催された「道北彫刻めぐり」に参加してきた。コースは日本海側のオロロンラインを北上し、1日目は音威子府村のビッキ美術館を回って「びふか温泉」に宿泊、2日目は名寄を経由して、旭川市内の目的地を回り帰札するコースである。訪れた主な場所はビッキの美術館と高橋昭五郎の彫刻を展示していた音威子府村の体育館、船越桂展の道立旭川美術館、船越保武展の旭川市彫刻美術館および北海道療育園の「彫刻の森」である。

今回は紙面の関係でビッキの美術館と北海道療育園の「彫刻の森」のみについて感想と若干の紹介を行うこととしたい。



ビッキ美術館横広場にて
(道北彫刻めぐり参加者一同)

ビッキの美術館は今春開設された村営の新しい美術館で、正式名称は「エコミュージアムおさしまセンターB I K K Yアトリエ3モア」で、廃校となった篠島小学校をビッキが住居兼アトリエとして1978年より使用していたのを改装したものである。モアは英語のmoreで宮の森のアトリエに名付けた「ア

トリエ モア」、次の白石のアトリエの「モアモア」、最後の篠島のアトリエの名称「3モア」をそのまま受け継いでいる。

入館するとすぐに「風の回廊」、次いで「朽ちた『オトイネップタワー』を床下に収めた部屋へと続き、最後は作品『TOH』が置かれた真っ暗な部屋で『樹氣』に包まれ、さらにビッキゆかりの『いないいないばあー』でくつろぎながらビッキを追憶できるようにできており、全体として『ビッキの魂に出会う場所』を意図して開設されたミュージアムとして、大変良い美術館であった。また村役場の課長さんが解説案内をして下さったが、これも大変良い案内であった。

北海道療育園の「彫刻の森」は旭川の春光台で重症心身障害児（者）施設を中心に福祉事業に取り組んでいる「社会福祉法人北海道療育園」が法人の理念に基づいて、神奈川県立美術館の酒井館長を長とする設置選考委員会を組織し、旭川市・北海道新聞社・STVなどの後援をえて、2007年度までに、1億円の寄付金を募って建設しているもので、現在は途上であるが、山内壯夫、佐藤忠良、渡辺行夫、眞板雅文、土谷武など著名彫刻家の作品がすでに面積11万m²を越える広大な疎林に配置されている。また周辺の道路沿いでは見事な花壇作りが行われており、「彫刻の森」とともにすでに地域住民の憩いの場となっている。

民間の一法人が地域にこのような文化施設を建設するのは、日本では極めて稀なことで大きな敬意を表したい。それとともに福祉を含めて社会保障が極めて困難な状況に置かれているなか、この事業がなんとしても成功することを願わざにはおられない。

今回のツアーは主催者側からの三輪館長と職員の森川さんを加えて総計23名で、団体行動する上では好都合な人数であった。季節的には紅葉にはやや早く、両日とも晴れとはいかなかったものの、雨にも妨げられず、やや強行軍とはなったが、良いツアーであった。最後にこの旅のためにパンフレットを作成して下さったことを含めて、お世話して下さった彫刻美術館に感謝の意を表明し、終わりとします。

道北彫刻めぐりに参加して 森 茂樹 会員

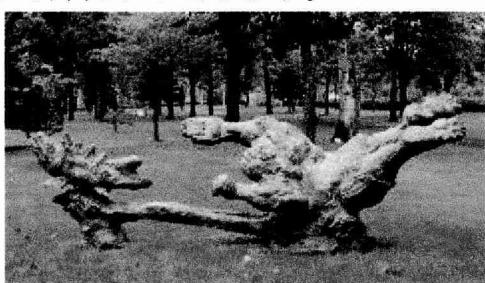
過去何回か稚内から羽幌、留萌、浜益経由で日本海沿いをドライブしたことはあります。いずれも札幌への帰途のため、ゆっくりと景観を見たことはありませんでした。この度（2003.9.17～18）は、札幌から出発というツアーナので、多少関心を持っていました。彫刻家の砂澤ビッキさんも名前程度しか記憶にありませんでした。

車内で渡された資料により人物像も判り好奇心を持って（BIKKY アトリエ3モア）を拝見しました。音威子府村：篠島（オサシマ）の地での（樹のこころにふれる。ビッキの魂に出会う。トーテムポールの木靈）など、一度ならず二度三度訪れたい気がします。

説明された弟子の方が、ビッキさんから、真冬の零下30℃の夜、機械の故障で呼び出され大変でしたと語っていました。平成元年（1989）57歳で亡くなられましたが、弟子の方々から、その思い出が語り継げられていくことでしょう。

次に、道立旭川美術館、旭川彫刻美術館を訪問し、最後に北海道療育園（旭川市春光台）の園庭の野外彫刻を鑑賞しました。みな力作揃いで感服しました。園の職員の方々や道民に協力を求め、彫刻を増やし「彫刻の森」構想等、それぞれの街での息吹を強く感じました。

終わりに、このツアーを計画、実行された札幌彫刻美術館：三輪望館長、森川秀美館員に厚く御礼申し上げます。



北海道療育園の園内

「加藤昭男/小川に魚が帰った日」

「なまこ山の自然」 国兼治徳



この奇妙な山の名を知ったのは、同期の橋本さんから彫刻美術館の近くに小さな山があるて、その山の植物について美術館友の会の方々に話をして欲しい、と誘いを受けたことに始まる。

宮の森にそんな山があつただろうか、植物の観察仲間で話題にのぼった記憶もないし、地図にも載っていない。とに角行けばわかるだろう、と5月2日に下見のつもりで軽装備して現地で彼と落ち合った。確かに小山があった。住宅に囲まれる以前であれば、遠くから眺めるとその全景は海に棲む棘皮動物の海鼠（ナマコ）に姿・形が似ていなくもないが、私はむしろナメクジに近いなと思った。頭に当たる南西から尾の北東に伸びた丘陵で、正式には「宮の森緑地」と刻印された石の標識が双方の出入口に建っている。背に当たる部分に一本の遊歩道があり、近くに住む人々の散歩道になっているようだ。

5月初めでは草本は少なく、樹肌や発芽した幼葉からナナカマドやシラカンバなどのわずかな樹種を数えることが出来た。北側の出入口にカタクリが一輪咲いていた。昔は筍の

ない斜面一体に咲いていたかもしれない。

彫刻美術館の周辺はカラー舗装され、洒落た街燈の並ぶ風致地区であるが、それに「なまこ山」が加わって趣きを増している。朝な夕なの小鳥のさえずり、山頂からの暮れなずむ空の色、垣間見る円山と藻岩山、そして背後の三角山と大倉山シャンツエは、四季折々の姿を見せて心を癒すに違いない。

秋に訪れたときはクズが目立った。葛は帰化植物ではないが、侵入した姿はインベーダーそのものである。しかし11月はじめに歩いた時は、黄ばんだ数葉残すだけの哀れなむくろと化して、冬の準備に入ったことを知った。そして山頂にはハイイヌガヤの緑がひときわ目立って見えた。

(野草研究者)



なまこ山の自然（国兼先生を囲んで）

なまこ山散策

榎本真澄 会員

去る9月23日 秋分の日。「皆さんの日ごろの行いがよろしいようで…」挨拶の人々がそう語った。全道快晴のよき日、お墓参に行かなくても どこかに出かけなさいと、背中を押されているようだ。

ならば私は、「なまこ山」を選ぼう。最後に彫刻美術館を訪れたのは 何時だっただろう。記憶をたぐるのが 大変なほどの久しぶり。

北区の我が家からは乗換えが三ヶ所だからと気合を入れて出掛けたら、早く着き過ぎ、不安になる。庭を散策、本館と記念館を見学するうちに徐々に思い出してきた。外に出ると、知った顔を見つけ、ホッとする。

私は常々出かけたら一つだけ覚えてくることを心がけている。忘れっぽくても、一つなら何とかなるかな？という安易な気持ちと、長く生きると一つを重ねても幾つかにはなる、という意義付けたい気持ちが入り混じっていると思う。さて今日の一つはどういうことになるのだろう。

講師の国兼先生は、初対面だったが気さくで、丁寧に説明して下さった。事前の下見でリストを作ったものの刈り取られ、現物がないものもある。と最初から笑わせてくれた。

当たり前のことかもしれないが、「植物は光がないと生きられない。どうやって光を取り入れるかと工夫し、変化する」と聞いた途端、少しばかり自分なりの体験を思い出し、植物が急に人間臭く迫ってきた。

程なく「これはクズ。三枚の葉がひと固まりで一つの葉を示す」と語る。子どもの頃クズの蔓をフジズルと覚え、生の茎は物を粗くしばるのに使ったものだ。料理でとろみをつけるくず粉はこの根からと知り、私の一つは早々に終わったように思えた。後日、姉妹に確認すると、私が誤って覚えていたことを知る。いわれの説明に、あちこちから「ナルホド」と声がする。皆さんも楽しそうだった。

本郷新の作品の所在。特別展の土屋公雄氏の記憶の説明。とうもろこしの差し入れ…。一つのはずに、嬉しいおまけが沢山ついてきた。ありがとう。



秋のなまこ山「宮の森緑地」の散策

彫刻鑑賞旅行

感想文集□②

秋の石狩へ！

原寿子 会員

石狩の3ヶ所を巡る秋の研修旅行は10月26日（土）に実施され、参加者は1歳から80歳まで、会員と一般を合わせて41名でした。バスの中で仲野会員から石狩近辺のパブリックアートの解説を聴き、予備知識を得ました。

まず、今年の総会の折に講演された川上りえさんのアトリエを訪問しました。何処までも広がる原野の中、七千坪の敷地に建つ二つ建物の前で、川上りえ・佐々木けいじご夫妻が笑顔で迎えてくれました。制作過程など



「アトリエ風景：佐々木けいし先生を囲んで」

の説明の後、案内されたアトリエには鋼材や線材、それらを加工する大型の機械や大小様々な作品群がありました。まだ水道も引かれていない場所で制作に挑むお二人の意欲に圧倒されました。

次に「劉連仁生還記念碑」を見学。行く道のバスの中、劉連仁さんについて資料を配っていただいて説明を受け、初めて詳細を知り、ショックを受けました。

畳一枚ほどの四角い石をくりぬき、中に枕のような石が一つあるこの碑は、第二次大戦

中、強制労働から逃れ、13年の逃亡生活の後半6年間を隠れ住んだ低い丘の前に、ひつそりと置かれていました。

発見され、中国の家族との再会後、日本の地元の人たちとの交流により、碑が作られました。発見されることを恐れながら、家族に会いたい一念で耐え抜いたであろう劉さんの気持ちを表現した作品。その製作過程とエピソードを語って下さったのは、碑の完成除幕を待たずに逝った制作者丸山 隆氏の愛弟子、加藤宏子・藤本和彦ご夫妻でした。

ふとみ温泉で昼食と懇親会。

「人生は短く、芸術は永いと言われるが、作品の中には忘れられていくものも多くあり、永く語り継がれる人生もある」との橋本会長の挨拶が心に染みました。

二組の若い芸術家夫妻の情熱に触れ、会員相互の心の交流も深められて満足の一日でした。
(石狩ツアー担当)

いきること、くらすこと

渡辺洋子 会員

十月の末、紅葉と澄んだ青空のコントラストが見事な石狩平野を会の皆さんと一緒に訪ね、私たち親子三人素敵な週末を過ごすことが出来ました。

まずは佐々木けいしさんと川上りえさんのアトリエに到着。私も大学で多少彫刻をかじった身であり、ベトナム人の主人も今札幌で彫刻家として活動中ですので大変興味のあるところです。まずはその広さと設備を見て俗っぽく「ああ、私たちもいつかこんなアトリエが欲しいわ」なんて漠然と思っていたが素敵なお二人に案内され、お話しするうちに「ああ、このお二人がここで暮らして、創作をしているんだ」という当たり前の現実を妙に実感して、お気楽な自分が恥ずかしくなりました。考えてみれば上水道も通っていない土地で冬は吹雪の襲撃の中、かさばる鉄の塊を相手に暮らしていくことが簡単なことであるはずがありません。あの設備もお二人の「創作」への意欲と探究心が自然に揃わせて来た

生活必需品なのでしょう。作家として常に初々しく躍進を続いている二人の生活の起点を、垣間見たどころか十分に堪能して感心させて頂き、また自分の乏しすぎる「創作生活」を反省しつつ再びバスに乗り込みました。

恥ずかしながら私は中国から日本に強制連行され、そして重労働させられていた炭鉱から脱走し、終戦も知らず13年間北海道の原野をたった一人で生きた「劉連仁」さんことをあまり知りませんでした。今回も丸山先生の作品として「碑」を見に行く、という軽い気持ちでの出発でした。

碑は緑の芝生の丘で控えめに、けれど猛々しく鎮座していました。ちっとも厭味のないその荒々しくも静寂な姿が反って彼の生きた孤高の年数に深みを与えます。実際に制作をなさった加藤宏子さんと藤本和彦さんにお話を聞くこともでき、この碑が丸山隆先生の遺作になることも知りました。



劉連仁生還記念碑（丸山 隆先生設計）

帰りのバスの窓から見えた石狩平野は今度は大自然の厳しさと奥深さを含んで鈍く沈んでいるように見えました。

石狩バスツアーリポート

大島美和子（大阪府貝塚市）

最初の見学場所は佐々木けいし・川上りえご夫妻の所でした。お二人の作品は、様々な想像力を膨らませてくれます。視覚的にずつしり重そうな作品は、実は持ち上げられるほ

どだったり、硬質な金属を使用しながら、スライムのような軟らかさを見事に表現なさり、嬉しい錯覚をさせてくれます。まさにお二人のおっしゃる「常識的な視点を超えた生命感」を強く感じました。

数年前、石狩市にアトリエを構えた際、近所の方々に仕事を理解してもらうために、地域に積極的に溶け込もうとする姿勢。現在は石狩市に、お二人の作品「黙」「水の和」「時計塔」が設置されています。これからも若い人たちを指導しながら、素晴らしい作品を生み出して頂くのを楽しみにしています。

中国から沼田の炭鉱に強制連行された劉さん。13年にも及ぶ過酷な脱走生活の中、中国で待つ家族のために生き抜く精神力によって奇跡的な生存だったのです。若い時代、迫害と過酷な逃亡生活に耐え抜き、40代にはいつたまたまウサギ狩りに出た袴田政治さんに発見、救出されました。その後、祖国に生還し、家族と再会を果たしました。当別の皆様が13年にわたる精神力をねぎらう思いで3度招待しているうちに友好が深まり、生還記念碑の計画となったとのことです。

記念碑は、この制作中に亡くなられた故丸山隆先生のご意志を継いで、加藤さんたちを中心に、穴居していた山を背に、袴田さんの家の斜め前の畠の中に昨年建立されました。黒御影石で、おおがらな体を屈め身を隠しただろう大きさの穴に、唯一磨かれた楕円形の石の枕が一つ。劉さんに対する丸山先生の優しい心遣いが表されています。劉さんのようなことが二度とあってはならない。

平和な世界を願ってやみません。



劉連仁生還記念碑を囲んで

ギャラリーシリーズ 3

～「ギャラリー門馬」を訪れて～

原 典夫 会員

「ギャラリー門馬」は藻岩山麓道を挟んで旭ヶ丘高校の向い側の閑静な住宅街（中央区旭ヶ丘2丁目3-38 西向き；電話：562-1055）にある。

ギャラリーの主は83歳になる門馬よ宇子さんである。ご主人が亡くなったあと、5年前に3階建の自宅を自分のアトリエを含めて全体をギャラリーに改装した。その展示スペースには、通常、門馬さんがこれまでに蒐集した100点余りの油絵や版画などが適宜展示されている。

これらは比較的小型で抽象的なものが多いように思われる。また、このギャラリーを、年に一度は新進の芸術家などの企画展に無料で提供し、またクリスマスなどにはミニコンサートやパーティに開放している。

門馬さんご自身は、若くして絵画を始めたが、家庭の都合でいったん止め、50歳を過ぎてから再び絵筆を持つようになったという。國松登先生を師とし、主に風景画を描き、道内外の公募展にも出品を重ねていて昨年は全道展の会友から会員に推されている。

門馬さんの作品は、7年前の77歳の頃から大きく変貌し、油絵からいわゆる現代作家が行うようなオブジェやインスタレーションへ向かった。80歳を超えた今も旺盛な好奇心と若々しい精神をもって実験的作品の制作を楽しみ、現代美術展にも積極的に出品している。

門馬さんは、これまでの一連の作品をもって、平成10年と13年の2回、このギャラリーで自作展を開催している。次回は85歳になる平成17年に、画家と陶芸家の二人の娘さんとの三人展を開きたいと張り切っている。

なお、平成14年に建物の一部を改造して、賃貸専用の「ギャラリー門馬ANEX」をつくった。利用期間は5月から10月までだが、小規模ながら真っ白な壁面と自然光を取り入れた開放感のあるスペースは、美術関係者には結構人気があるようである。

■本田明二ギャラリーから

～展示内容の変更～ 近藤 泉

4月22日にオープンしてから、あつという間に半年が過ぎました。いつもアトリエで見慣れていた作品が、ギャラリーに置いてみると、新鮮な表情を見せることに気がつきました。やはり、作品というものは人の目に触れることで、生き生きとしてくることが実感できました。

今回、「人間」を中心に、作品を選んでいます。本田明二の作品というと、「馬」、「ふくろう」というのをイメージする方もいらっしゃると思います。

今回は、モデルがいるようなわかりやすい作品を並べました。是非、ご覧ください。また、休館日が変わりましたので、お知らせします。

本田明二 ギャラリー

場所：札幌市中央区南15条西13丁目1-34（北西角） 電話：011-530-3050

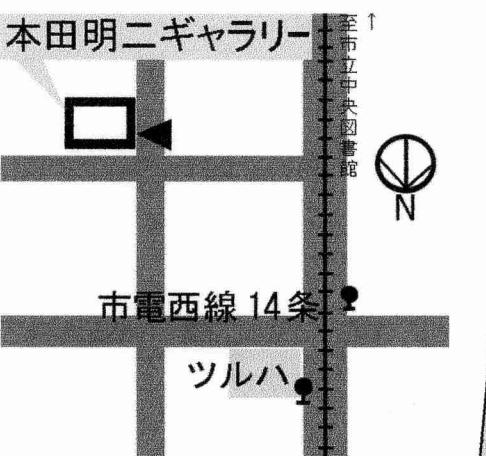
市電：西線14条下車5分

時間：午前10時～午後4時

休館日：日曜日と月曜日

年末年始の休館：

平成15年12月21日から
平成16年 1月12日まで



▽ 二つの展覧会

今年度の本郷新賞は土屋公雄氏が、中原悌二郎賞は舟越桂氏が受賞された。この受賞を記念した展覧会がほぼ同時期に開催されたので、その感想を記してみたい。

舟越桂展を訪れたのはオープニングの日だった。旭川の道立美術館に着いたのは10時10分、駐車場は満車だったが札幌Noと見てか係員が「今1台出て行ったので気をつけて駐車して下さい」と入れてくれた、ありがたい。

会場へ。入口に悌二郎賞の「水の山」が置かれている。5~6人の華やかな人たちが囲んでいるが像はそれに負けていない。暖かい手触り感、鮮やかな色彩。初期から新作までのなかで約30点の展示、素晴らしい。ゆっくりとひとまわりする。

見終わって図録を求める。全頁カラーの変形A4版221ページ、ずつしりと重い。2000円、見ごたえがありそうだ。

それを携えてホテルの会場へ。まだ早い時間だが沢山の人がいる。何があるんだろうと思つてよく見ると殆んどの人が舟越桂のチラシを手にしている。いやはや、それも半分は若い女性だ。

広い会場だが受け付けが始まって20分位で追加の椅子が運び込まれる。600人くらいの入場、満席だ。60分の講演のあと質問時間、手を上げているのはみんな女性。男が手を上げたら怒られそう。

皆んなが出るのを待つロビーへ。と、桂さんが目の前のソファーで休んでいた。しめた、用意した図録にサインをもらう。それを目にした人達が私ももとサインを求めだし、あわてて記帳席が設けられた。

良かった。華やかで明るい一日だった。

一週間後、本郷新賞の土屋展を見ようと宮の森へ。

土屋公雄彫刻展と看板は出ているが屋外はいつものまま、わだつみ像がこちらを見ている。屋外に作品は置かなかったのだと思いつつ中へ。

シーンとしていて誰もいない。図録をと言ふと会員は500円ですとB5版11ページ

抜海の目

のオール白黒の資料のような図録が渡された。中は受賞の経緯と受賞作品の紹介だけ。出品リストはB5の別刷りで図録に挟まれていた。これが一般入館者700円の図録か！

入口奥にブラックダイアリーと題したマッチの軸木と流木の20センチ角位の小品がひとつ、表面が焼け焦げている。中段に松杭が7本、20世紀の記憶と題した作品、旧丸ビルを支えていた杭で1923年から1999年までに起こったわが国の重大な出来事を年を追つて書いてあることだが、字が小さい上かすれて判読しにくく、しゃがまなければ読めなかつたりで読む気にならない。

2階に上がる。右壁に9枚、左壁に7枚の写真。土屋作品の紹介写真だ。奥に向かうと床に割れたガラスと鏡が散乱している。廃業した理髪店で使われていた鏡、何千人何万人もの顔を映してきた鏡は埃をかぶり捨てられていた。この鏡は過去の時間と現在そして未来を結びつける媒体だと説明されている。しかし何だかよく解らない。

更にはグラスのバラと碎けたガラスのバラの対比へと続く。最後は灰のバラ。松戸市の解体家屋廃材を焼尽(?)して出来た灰で作った「灰のバラ」だ。造形的には面白いがどれもこれもが廃物廃材を使っての作品だなと思ってしまう。

引き返して下りようすると、記憶という言葉の入った文章が目に入った。読み進んでショック『父親の遺体を焼いた日、僕はその灰をひとつまみ食べた』とある。

外の光の中に出ても暗い暗い印象が続く、そしてそれは家に帰り着くまで続いた。

この暗さと舟越桂展の華やかさとのどうしようもない違い！この印象は私だけなのだろうか。土屋公雄展を見た人に、印象を、できれば感想を伺いたい、と今でも思っている。

▽彫刻美術館との出会いを通じて今思うこと

宮の森の地に移り住んできて一年余り後、次男の通う幼稚園の家庭教育学級で、世話係を引き受けた。子育てに追われる日々だからこそ心に潤いを持たねばと、当時出来て間もない札幌彫刻美術館を皆で訪れた。

途中の道を三々五々連れ立って歩くのすら新鮮な心地がし、弾むような思いに包まれた。幼稚園児の母親である学級生達も格別柔らかい表情を見せていましたように覚えている。

両側に縁がこぼれる様に広がる道を歩む何という贅沢さ…。彫刻美術館の庭には、ずっと以前から其処に存在したかのような塑像達が私達を待っていた。「我が家からこんな間近で“芸術鑑賞”ができるなんて！」と感嘆したのを思い出す。よく考えてみると人は皆生まれながらにして表現する何物かを持っているのではないだろうか。それが術もなく日常茶飯事にかまけている(?)内に、いつしか影を潜めてしまったのではないか。浜辺の砂で飽きず団子を作ったり、裏山へ粘土を取りに行っては捏ね、いつかすごいものを形作る夢を見たり、拾った小枝に小刀で彫り込んだり…そんな遠い日の記憶、きっと誰もが思い出の中にしまってある筈。私自身も幼児期から思春期まで絶えず何かをこしらえていたし、其処かしこに絵を描いていた気もする。

さて話を戻すと、近くに美術館が存在する有り難い事実に反し、あれから十数年、何故か再訪せずに過ごして来てしまった。

それが昨年、無料開放する日がある事に初めて気付き、思い切って訪ねてみた。風格のある方がスリッパを出して下さったのには驚いた。

説明文を読みながらゆっくり館内を巡った。学芸員さんの解説を添えて頂けたら、もっと作品に近づけたのではないかと後になって考えた。お願いすべきだったのかもしれない。

市民に愛される美術館を期待する以上に、社会全体にゆとりを取り戻したいと切に願う今日である。もちろん、自分自身の慌しい暮らし振りを深く反省しながらの話である。

展覧会案内

本郷新ゆかりの画家 柄内先生の展覧会

「柄内忠男の世界展」

1950年～2003年の画業から52点を展示

開催場所：道立近代美術館 011-612-7000

開催日時：平成16年1月31日(土)～4月11日(日)

1923年(大正12年)生まれ。本郷新との出会いは昭和25年新制作展に出品された『わだつみ』像の前で始まる。その後大通り公園『いづみ』像の設置(1959)のため来札されたのを機に親交を重ね、札幌ではいつも本郷新、本田明二と3人で酒を酌み交わしていた。最近柄内先生は“絵を描き続けたい！そのためには命の大切さを思う!!”と述懐している。

身近なアーチスト 78名の展覧会



〒060-0061 札幌市中央区南1条西3丁目1番地

ラ・ガレリア5階(丸一ビルディング：電話222-3698)

2003年12月23日(火)～2004年1月4日(日)

ダム ダン ライ

Dam Dang Lai Happy New Year Exhibition

札幌市内4つのカフェで同時開催!! 2003～1月31日まで

◎サッポロ珈琲館本館(15日まで)西八軒1条3丁目1-63

◎Tom's Café 北)北6西2札幌駅東口 パセオB1

◎Kudo's Café 北)北23西4プラザハイツ24 1階

◎Café Rosso 中)北3東3、1番地

<http://blake.prohosting.com/dalai/>

友の会新年会

日時：平成16年1月24日（土）

17時30分～

会場：不二家2階（電話：221-0284）

札幌市中央区北2条西2丁目（西向き）

出欠：同封のハガキで1月18日（日）まで
にご連絡下さい

連絡先 斎藤美年子 電話とfax 643-7246

プログラム

●浦口鉄男先生の白寿をお祝いして

敬愛する友の会顧問

浦口鉄男先生が

今年数え年99歳の

白寿を迎えるされました。



元衆議院議員

前友の会会長

明治39年1月12日生

先生を皆で囲んでご健康とご長寿を祝福いたしましょう。日ごろ 詩吟をなさったり、短歌を創作したりしておられ、平成12年度NHK 全国短歌大会には次の句が入選しました。（94歳）

『もう一度 叱られたいなあの気魄
お前ら ほんとに生きているかと』

●上遠野 敏先生の講演

演題：“楽しく生きる『夢』について”

福島県磐城郡上遠野（現いわき市）出身
1955年生東京芸術大学彫刻科卒業（1984）、
同大大学院美術研究科彫刻専攻修士課程終
(1986)、同大助手、非常勤講師を経て札幌市
立専門学校赴任（1993）、教授、札幌市在住
インスタレーション制作分野で活躍『北の創
造者たち展—虚実皮膜に』に出展

芸術の森美術館で現在開催中

2004年1月18日（日）まで

友の会
だより

彫刻美術館友の会ホームページ

<http://sapporo-chokoku.jp>

近く更新予定
彫刻芸術の新しい
情報源です

会報編集委員会の開催

▽編集委員の皆様に

新年会当日、13時から不二家の会場で
「いづみ」7号の編集会議を開催します。
ご出席下さいますように。

▽編集委員の募集！！

PCによる会報とホームページの編集が主です。
編集委員までご連絡ください。011-643-7246

編集後記

諸先生はじめ会員の皆様のご協力のおかげで、
6号も12ページになり 感謝いたします。
原稿集め、入力、校正 印刷 発送 すべて
素人の我々です。ご感想、ご意見をお寄せ
くださいようお願いいたします。 (濱)

彫刻美術館友の会 会報「いづみ」No.6

財団法人札幌彫刻美術館内 編集責任者濱久子

〒064-0954

札幌市中央区宮の森4条12丁目

電話&ファックス：011-642-5709

平成16年1月1日発行

編集委員の連絡先：電話とファックス

斎藤美年子：011-643-7246

濱 久子：011-893-5212